

17期 小島 敬

1. ふるさとの山・鈴鹿
2. 鈴鹿を点で遊ぶ（湯の山温泉、志賀直哉『菰野』、映画『男はつらいよ フーテンの寅』）
3. 鈴鹿を線で遊ぶ（登山/沢の遡行/君ヶ畑越え、五代友厚・次女の治田鉦山、『冬虫夏草』）
4. 鈴鹿を面で遊ぶ（朝明溪谷の小屋）
5. 鈴鹿最奥の廃村にある山小屋

1. ふるさとの山・鈴鹿

三重と滋賀の県境に南北に連なる鈴鹿山脈は、三重はもちろんのこと愛知、岐阜の人々にとってもふるさとの山だ。三重県在住・出身のワングル諸兄姉には異論もあろうが、鈴鹿は三重だけのものではないのだ。名古屋からも、朝な夕なに鈴鹿の山々を眺めることができる。尾張地方の学校には、鈴鹿の山を唄った校歌が多い。知多半島からも伊勢湾越しに山並みを望むことができる。セントレア（中部国際空港）からの夕景は美しい。



【①鈴鹿の山並み（知多半島・大野海岸から）】

鈴鹿の山は何よりもアクセスがいい。名古屋からだと公共機関で麓まで1時間半～2時間だ。車で新名神や東名阪を行けばさらに早い。三重県側は急峻で、登山口から山頂まで3時間もあれば登れる。週末に気軽に行けるのが鈴鹿の特徴だ。東海地方の大学〔名古屋、名古屋工業、名古屋市立、三重、岐阜、名城等〕ワングルのトレーニング山行には鈴鹿がよく使われる。鈴鹿最奥の廃村には名大ワングルの山小屋（1966年～）がある。

坪井さん（24期）の呼びかけでKUWV 東海支部が発足したのは2012年4月。記念すべき第1回PW〔同年5月、PL竹本さん（21期）〕は、ロープ

ウェイがあり老若男女誰でも登れるということで、当然のように御在所岳（1212m）が選ばれた。5月の御在所岳はツツジ科のアカヤシオやシロヤシオが山肌を鮮やかに彩る。ロープウェイ組と登山組に分かれ、山頂で15名が合流。下山後は地元白井さん（9期）ご紹介の温泉でPWを締めくくった。（東海支部発足の経緯や御在所岳PWの詳細は『やまざと』vol.27をご覧ください。）

東海支部が発足して10年になろうとしている。同期の横のつながりだけだったのが、支部の発足で先輩後輩の縦のつながりができた。こういう機会を作ってくれた坪井さんには本当に感謝している。縦の糸と横の糸が織りなす布は、坪井さんには今どう見えているのだろう。

鈴鹿北部の山体は石灰岩、南部は花崗岩で植生も違う。東西でも全く異なる相貌を持つ。近江側は奥深く重厚で、忍者が身を潜めるにはうってつけだ。山麓に沿って、天台宗の湖東三山（西明寺、金剛輪寺、百済寺）などの古刹が点在している。琵琶湖に注ぐ愛知（えち）川を遡っていくと臨済宗永源寺大本山・永源寺がある。愛知川は茶屋川と神崎川に分かれ、鈴鹿最奥の地へと続いている。

畿内と東国を結ぶ街道として、いにしえより多くの道が鈴鹿山脈を越えている。北から、治田峠（770m）、石樽峠（690m）、八風峠（940m）、根の平峠（803m 千草越えとも呼ばれる）、武平峠（880m）、鈴鹿峠（357m）などがある。鈴鹿峠が最も標高が低いので飛鳥時代から整備されてきた。

坂口安吾『桜の森の満開の下』（1947年）は、昔の鈴鹿峠の山賊と鬼女の話だ。京で白拍子や武士、貴族などが登場するので平安時代後期から鎌倉時代の頃と思われる。戦国時代の武将では織田信長の1570年の千草越えが知られている。岐阜へ戻る信長の行く手を浅井長政が阻んだため近江路を断念し、千草越えに変更した。峠で刺客の杉谷善住坊に待ち伏せされ鉄砲で撃たれたが弾は逸れ、信長は無事に岐阜へ戻ることができた。徳川家康も、1582年本能寺の変を受けて三河へ逃れる時に鈴鹿の山を越えている。

鈴鹿はかつて鉦山開発や炭焼きなどで賑わいを見せた。そこには多くの埋もれた歴史がある。近江側の木地師の里は惟喬親王伝説で有名だ。これは史実ではないが、伝説が生まれその言い伝えを信じてきた人々の暮らしは興味深い。

長い廊下とトロが連続し、遡行の醍醐味が楽しめる。鈴鹿では一番人気の沢だ。下は、茶屋川入口にあった愛知川上流漁業組合の案内看板。右端の北側から南下するのが茶屋川、南側から合流する川が神崎川だ。下流で御池川を交えた愛知川は、永源寺ダムに流れ込む。案内図の中央を国道 421 号〔八風街道〕が横切っている。石樽（いしぐれ）トンネルを東に抜けると三重県だ。



【③滋賀県・愛知川上流案内図】

《峠越え》歴史に思いをはせて歩くなら君ヶ畑越え〔治田（はった）峠越え〕がお勧めだ。近江側から辿ってみよう。君ヶ畑越えは湖東から北勢への主要なルートだった。茨川廃村近くの蛇谷鉱山では銀を採掘していた。銀山の全盛時にはかなりの人々が茨川に住み、商人も往来していたという。

君ヶ畑越え：永源寺⇒政所集落⇒蛭谷・木地師の里⇒君ヶ畑集落⇒茨川廃村⇒治田峠⇒青川峡（治田鉱山跡）→新町⇒三岐鉄道北勢線阿下喜駅〔西桑名駅までの北勢線は鉄道ファンには見逃せない。黒部峡谷鉄道と同じ特殊狭軌（ナローゲート）で日本最長。特殊狭軌は国内に3路線しか残っておらず、もう一路線は四日市あすなろう鉄道。阿下喜駅前には軽便鉄道博物館もある〕

君ヶ畑集落から新町までは5時間強の道のりだが、できれば途中の茨川廃村の河原にテントを張って一夜を過ごしたい。茨川廃村から東へ治田峠（770m）を越えると三重県側の青川峡にはいる。ここには治田鉱山跡がある。蛇谷鉱山の衰退後、江戸時代には治田鉱山〔銅・銀など〕が最盛期を迎えた。幕府は治田を天領とし銀山奉行を置いた。鉱山近くには寺が建てられ、女郎屋も軒を連ねていたという。明治以降経営者は変わったが、1919年、この治田鉱山の掘削権を五代藍子が購入した。

五代友厚（1836-1885年。ディーン・フジオカのイメージが強すぎて、友厚本人の顔が思い浮かばない）の次女藍子（1876-1965年）だ。藍子は治田鉱山の麓町に移り住み、鉱山経営に打ち込んだ。しかし採算が取れぬまま閉山となり、藍子もこの地で生涯を終えた。

コロナ禍が終息していない状況では君ヶ畑越えコースは行けない。三重県側の青川峡も豪雨で谷の形が大きく変わったので事前確認が必要だ。

100年以上前の近江側の鈴鹿を舞台にした幻想譚が梨木香歩の『冬虫夏草』（2013年）だ。京都に住む主人公の学士・綿貫征四郎は、友人の飼った犬ゴローを探して鈴鹿の山中に分け入る。君ヶ畑越えの途だ。イワナの夫婦が営む「おやど いわな」や河童などが普通に出てくる。奥永源寺から政所、君ヶ畑の集落を抜け、茨川集落に辿り着く。最後に茶屋川上流の三筋滝で、ゴローを発見。三筋滝の別名は「犬帰りの滝」だ。惟喬親王が御池岳へ雨乞いの祈願に登山した折り、三筋滝でお供の犬が登れずに戻ったという故事が残っている。梨木果歩はこの話に着想を得たのかもしれない。



【④君ヶ畑集落入口 手前で引き返した】

4. 面で遊ぶ（朝明溪谷の小屋）

僕の中学には、珍しくワンダーフォーゲル部があった。顧問の先生が社会人山岳会メンバーで、自分の趣味で創部したらしい。友人Kとはそのワンゲルで知り合った。中1ながら既に老境の域に達していた彼は大人との付き合いのすべを心得ており、顧問の先生ともすぐ親しくなった。卒業後、朝明（あさけ）溪谷〔釈迦ヶ岳を源流とする三重県側の溪谷〕の別荘地で小屋の建設が始まると、高校生になったばかりのKは毎週のように小屋作業に駆り出された。なにしろ先生が車で彼の

自宅へ迎えに来る〔強制連行〕ので逃げようがないのだ。その見返りに彼は小屋の永久使用権を獲得した。お陰で僕は彼と一緒にいく限り、この小屋を自由に使うことができるようになった。

小屋が完成した高1の終わりから10年余り、Kとこの小屋に足しげく通った。ありがたいことに小屋には電気が引かれていた。水は近くの沢から引いた。オーナー（社会人山岳会メンバー）がふとん屋さんだったので、大人数が泊まるのに苦労はなかった。夜は枕投げで遊んだ〔修学旅行の小学生か〕。冬はこたつにはいって暖を取り、夏は野外でバーベキューや花火大会をして楽しんだ。大学に入ってからも、帰省のたびKとこの小屋に泊まった。小屋をベースに、釈迦ヶ岳に登ったり、三重県側の急峻な沢（流レ谷、水無谷など）を詰めたり、主稜線を越えて滋賀県側の愛知川（神崎川）を遡行したりした。

小屋がなければ、こんなに鈴鹿を身近に思うこともなかったろう。小屋で新年を迎えるのが恒例になった。初日の出など拝んだためしはなかったが小屋で過ごす時間がうれしかった。社会人になってもこの小屋にはお世話になった。いろいろな人たちと泊まることができたのは友人Kのお陰だ。小屋があると本当にそこはホーム・グラウンドという気持ちになる。小屋は小屋にしか過ぎないけど、ここに集まる人たちによって小屋も変わっていく。それが面白かった。しばらくして彼も僕も名古屋を離れ、小屋へ行く機会は無くなった。

去年、40年ぶりに朝明溪谷を車で訪ねたが、小屋は跡形も無かった。でも朝明の小屋で過ごした友人や仲間との至福の時間は強く記憶に刻まれている。この思い出は色あせることはない。

5. 最奥の廃村にある山小屋

名大ワングルの山小屋が滋賀県側、茶屋川の茨川廃村（標高560m）にある。茨川は大変な僻村で、1887年（明治20年）、集落で飼っていた牛が狼に襲われたという記録が残っているほどだ。銀山や炭焼きで栄えた村も戦後は衰退し、林道が開通（1954年）するや離村が始まった。結局、村に電気が引かれることはなかった。1965年の廃村時に10戸近くあった建物は、今はわずか2戸だ。ワングルの山小屋〔1966年から借りている茅葺民家〕と、滋賀県立八幡工業高校山岳部の前進基地〔旧

政所小学校茨川分校の建物〕だ。この2つの建物はカーナビにも載っている。もちろん、どちらも部外者は使えない。廃村後は林道が不通になったので、ワングルの小屋へは三重県側の青川峡から治田峠を越えていたのだらう。



【⑤ワングル茨川小屋】

近年茨川林道の整備は進んだが、一般道ではないので崖崩れで通れなくなることがある。未舗装で凸凹もひどい。ある春の日、悪路に強いSUVで廃村へ出かけた。鈴鹿山脈をぶち抜く全長4kmの石樽トンネルの開通（2011年3月）で近江側へのアクセスは飛躍的に良くなり、名古屋から茨川廃村まで2時間で行けるようになった。麓の木々は青葉の盛りだというのに、春遅い茶屋川沿いの緑はまだ淡い。山桜や山つつじ、藪椿が見頃だった。空気もすがすがしい。聞こえてくるのは川のせせらぎと鳥のさえずりだけだ。途中イワナの釣り人を見かけたが、廃村に人の気配はなかった。

茨川の山小屋は、とてもふさわしい場所にある。西丸震哉は『山小舎を造ろうヨ』（1987年）の中で、山小屋の適地例として、完全に浮世から隔てられた別世界しかも半日くらいで行けるところを「手近な人外境」として挙げている。茨川廃村は下界から隔絶されており深山の雰囲気を堪能できる。車でも行けるが林道は廃村手前で通行止めになっているので、一般人や釣り人に邪魔されることもない。山小屋をベースに鈴鹿の最高峰・御池岳への周遊ができるし、鈴鹿の主稜線も近きさまざまなバリエーションルートが楽しめる。

小屋作業の時には、健脚組は治田峠を越え、熟年組や現役の作業隊は車に資材を積み林道経由ではいるのだらう。自分たちが住む名古屋から毎日眺める鈴鹿の山、そこに山小屋を求めたのは、ごく自然な成り行きだったのだと思う。